

# 平岡宏一師著『秘密集会タंत्रラ概論』出版によせて 日本で唯一の聖典出版を喜ぶ

高野山真言宗前管長 松長有慶

2月16日開催の出版祝賀会における祝辞を要約(文責・橋本)



祝辞をのべる松長大僧正

真言宗では大日経と金剛頂経という二つのお経があります。大日経は一つに纏まっていますが、金剛頂経は十八のテーマで講義した經典といえます。各々の会場で仏様がお説きになった。十八の中でおかっているのは初会の金剛頂経と第六会の理趣経、平岡先生が研究されている十五会の秘密集会、この三つです。

秘密集会を最初にやりだしたのは私です。私が高野山大学から東北大学院にいった時、大師以外で密教を勉強したいということで、その時の指導教授羽田野伯猷先生に勧められ始めました。

平岡先生が高野山大学院にこられた時に、秘密集会をやりたと言われました。

私は秘密集会を一生懸命研究しました。既存のサンスクリット本はかなりデータメなものでしたので、インドのパトナ研究所にあった『灯作明』から秘密集会タंत्रラ全体の註釈を手に入れ、これをもとにしてチベット文漢文を照らしてサンスクリットの校訂本を作りました。またその和訳も発表しました。

でも今考えてみると、城攻めに例えれば、せいぜい外堀と内堀を埋めた程度です。それは秘密集会の歴史的な変遷課程にとどまったという事で、それとまったくの別な事です。それと全然別な世界の人々が秘密集会の専門家と思っ

ると認識しています。ところが平岡先生はヘリコプターで本丸に乗りこんで教えを征服してしまっただけです。ヘリコプターとはチベット語を自由に操ることです。私にはできなかった。私がチベット語を勉強した時は、チベット人を見た事のない時代でした。だから文

献しかやっていない。平岡先生の事は世界的な値打ちがある。日本ではトップレベルです。チベット語ができると、チベットの阿闍梨に直接ついて伝統を継承された。行法の中から、秘密集会を解明されていった。だからお城が陥落したわけです。世界的にもこういう業績をあげた人はいないと思います。チベット人はチベット人として

その伝承の中で研究しているが、それは他の人にオープンにされない状態でした。それをきちんとやってのけられた。外国にはチベット語に堪能な人は沢山いますが、残念な事に密教に関心がない。ヘリコプターを操縦する技能も出

ておられて、初めてこれが出

来上がったわけです。

それは平岡家の伝統といいますが、祖父の岩峯先生、父君の英信先生がチベットの難民を引き受けられ、インドでギユメ寺を応援されて、多くの方を救ってこられた。その中で平岡先生がギユメにいられて、直ぐに密教の秘伝をチベットの方から受けられた。そういう因縁がずっと平岡先生に備わっていた、ということだと思えます。平岡先生の奥さんもチベット人が来られたらお世話され、業績をサポートされたということであり

ます。平岡先生は学者として超一流の仕事をして、そして清風学園という大所帯を背負って大きな実績をあげてきた。学者、教育者、経営者としても一流の仕事ができたという、恵まれた環境と才能が一つに

なつたんだと思います。私も若い時に、後期密教を専門としてやってきました。左道密教を勉強してと馬鹿に

されましたが、今やってきてよかったなと思う事があります。真言僧侶として毎朝拝ん

ていますが、どうしても仏さんと一体化ができない。事相

といつても形ばかりになりがちです。チベット密教の後期密教次第は実に人間の生理に

あつたような仕組みができて

いるんです。そういう構造を

知っているわけですね。ですから仏さんと本当に一体にな

るのには、チベット密教からかなり深く学べると

考えています。

大師は恵果阿闍梨のもとで密教を受けられ、恵果阿闍梨

が亡くなる直前にお前は東の

国に帰れ、お前の弟子にな

れ変わって、お前の弟子にな

るとおっしゃったんです。

私は、生まれ変わって平岡

先生の弟子になって今度はこ

の行法次第をびつしり受けて、

日本の事相を改革せねばなら

ないと思つています。

平岡先生の素晴らしい業績、

世界的な業績は、十年、二十

年、日本密教が事相をどうす

るかという問題になった時、

最高の聖典になるに違いない

と思つています。

## 『秘密集会タントラ概論』

平岡宏一著

法蔵館刊  
本体価格三三〇〇円十税

## ■書評■



## 即身成仏への道

評者 高知 大日寺住職 川崎一洸

現在、密教が生きた形で信  
仰されているのは、ネパールの  
カトマンズ盆地、中国の雲  
南省の一部を除いては、日本  
とチベット文化圏のみにおい  
てである。両地域はまさに、  
密教の法燈といふ血でつなが  
った兄弟であるといえよう。

チベット密教の最大の特徴  
は、日本へは伝えられること  
がなかった、インドで九世紀  
以後に隆盛した後期密教の法  
脈を受け継いでいるところにある。後期密教の行法には、  
インドの伝統的な生理学説が  
大胆に導入されており、その  
実践には、ヨーガの技法に熟

達した阿闍梨の指導が必須と  
される。

平岡宏一先生は、チベット  
動乱を経てインドに再建され  
たギムメ寺において、中観を  
中心とする顕教を学ばれたの  
ち、同寺の管長を務めた碩学  
ロサン・ガンワン師より、後  
期密教に関する理論と実践を  
伝授された異色の研究者であ  
る。新たに上梓された『秘密  
集会タントラ概論』は、その  
伝授録に相当する書物である。  
具体的には、伝授の際にテキ  
ストとして使用されたヤンチ  
エン・ガロ(一七四〇〜一八  
二七)の著作『吉祥秘密集会

の聖者流と随順する真言(密  
教)の地(修行階梯)と道  
(修行道)を規定する善説に  
して、資質の勝れた者たちに  
とつての棧橋(の和訳と、詳  
細な註から構成される。

チベットで「無上瑜伽タン  
トラ」と呼ばれる後期密教の  
聖典のうち、根本となるのが  
『秘密集会タントラ』である。

ただ、この聖典の内容は難解  
であるため、インドでさまざま  
な解釈学派が生じた。ガラ  
イ・ラマ法王やロサン・ダン  
ワン師が属するチベット仏教  
のゲルク派では、宗祖のツォ  
ンカバ以来、聖龍樹によって  
始められたとされる聖者流が  
珍重されてきた。

後期密教の行法は、曼荼羅  
や本尊を觀想する生起次第と、  
体内の器官を活性化させる特  
殊なヨーガによって即身成仏  
を図る究竟次第の、大きく二  
つのプロセスからなっており、  
特に後者が深秘とされる。聖  
者流が伝える究竟次第では、  
体内を流れる「風」と呼ばれ  
る気息を操り、一切空を悟つ  
た時に現れる「光明」(プラ

バースヴァラ)の境地を獲得  
することが目標とされる。

なお、「光明」の境地は、  
調息によって「風」を制御し  
ながら瞑想し、心と心所(心  
の活動)、そして無明の三者  
を解体することによって得ら  
れるとされるが、聖者流では、  
その境地に入る前に、「幻身」  
を成就して衆生の救済に努め  
るよう定められている。「幻  
身」とは、智慧を自性とし、  
時間や空間に制限されること  
のない自在な身体である。

この「幻身」は、平岡先生  
の研究テーマの一つであるが、  
去年の日本密教学会で先生と  
ご一緒した際、宗祖弘法大師  
が高野山の奥之院に身体を留  
め置きながら、ピンチに陥つ  
たわれわれをお救いになるた  
めに津々浦々にお出ましにな  
るのは、まさにこの「幻身」  
を出現させておられるのでは  
ないだろうか?という会話を  
交わしたことが印象的に思い  
出される。大師が日本へお伝  
えになった密教とチベット密  
教、その実践の方法は違つて  
いても、辿り着く即身成仏の

境地は同じなのではなからう  
か。

未だにチベット密教を邪教  
だなどといって卑下する人も  
いるが、甚だ時代遅れと嘲笑  
せざるを得ない。チベット密  
教を勉強してみると、われわ  
れ真言行者が日々の行法や生  
活の中に活かすべきヒントが、  
満ち溢れている。平岡先生の  
玉著『秘密集会タントラ概論』  
も、一瞥すると難解な書物の  
ように思われるが、一言ずつ  
噛みしめて読んでゆくと、大  
乗仏教、そして密教の醍醐味  
が、じわりじわりと染み出て  
くる。

グローバルな時代にあつて、  
先徳たちが学べなかった後期  
密教の教えに容易に触れられ  
るようになったわれわれは、  
その恩恵をフルに活用しなけ  
ればならない。伝統を踏襲す  
ることばかりに固執していて  
は、日本の密教はますます形  
骸化してしまう。真の伝統は、  
常に創造され続けてゆくもの  
である。本書は、その創造に  
一役も二役も寄与する一冊で  
ある。